緑園生活

街の高台にある雑木林に移り住む

いつも眺めていた雑木林に移住する

敷地は大府市に位置し、もともとの地山が取り残されたような雑木林で、前面道路から約6m程のレベル差の高台になっている。建主である五十代のご夫婦は計画地のすぐ傍に長年住んできて、いつも自宅から見える雑木林が日常の風景になっていた。そんな矢先に新宅の計画地として候補にあがったのがこの雑木林であった。消え行く街の木々を守るため、街の高台を舞台にした新しい暮らしが始まる。

自らが住み、雑木の庭を育む事で街の緑を護る

庭づくりが趣味の建主にとって、自らそこに住み、緑を育む事はライフワークそのものである。この地で始まる新しい暮らしにおいても、建主が庭木をかまうシーンが自然と思い浮かぶ。消え行く街の緑も、この家族なら日常のなかで楽しく守ってくれるであろうと確信し、緑園を舞台にした、おおらかな生活空間を提供する事が、この家族とこの街のためになると感じた。

北の畑から見る

道路から見る

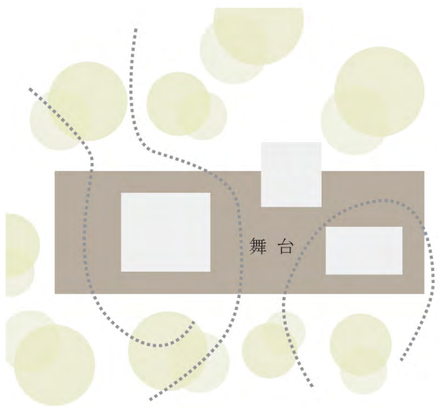
緑園と共に、暮らすために。

大屋根で生活の場をつくる

いつも眺めていた雑木林へ移り住む。街に残された、木々の生い茂る風景の中に、切妻型の大屋根をそっと架け、街の中に生活の場をつくる。

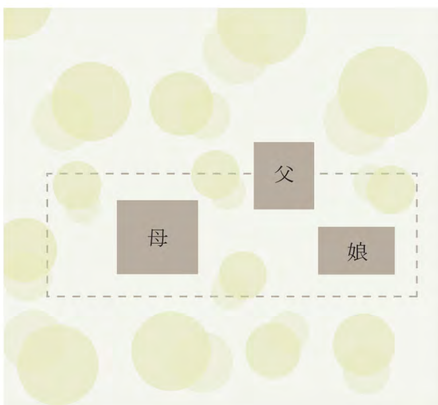
屋根の下に広がる舞台

雑木の庭と一体となった暮らしのために、一枚の舞台床を設けて、ぐるぐると回れる動線を確保することで、内外をまたいだ暮らしができる。



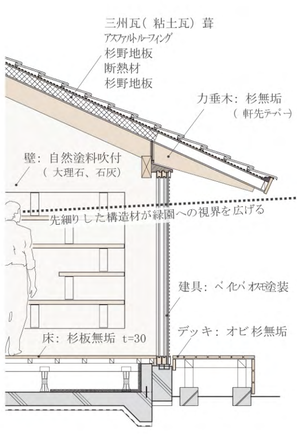
巣のような小さな居場所

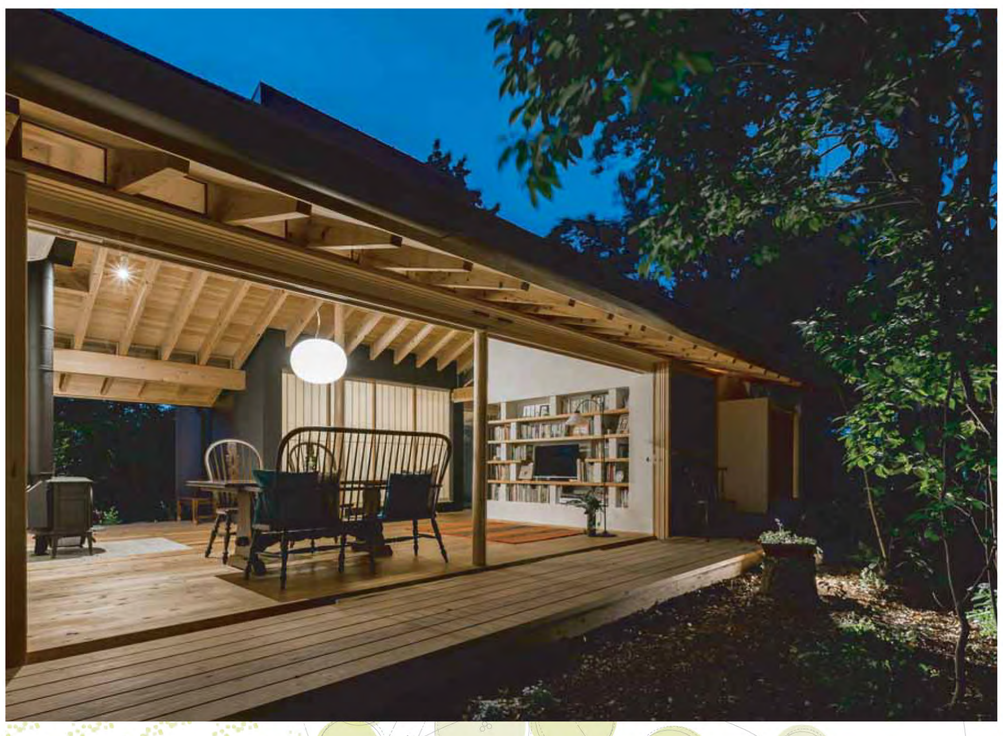
庭にまで展開する、おおらかな暮らしの中に、家族それぞれの小さな居場所を用意する。そこは、あえて小さな場とする事で、雑木の中にある巣のような居場所として、安心感を与える。

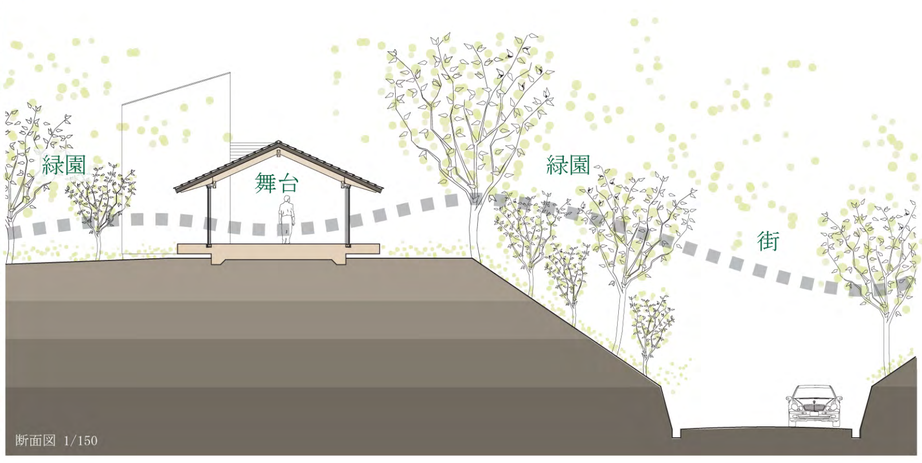


自然素材に抱かれる

木々がつくり出す木漏れ日の下、生活を守る屋根や壁、緑園の舞台となる床は、自然素材でしつらえる。無垢の心地よさに抱かれて、家の中でも自然のありがたみを感じて暮らす。







雑木林から緑園へ。緑園が結ぶ、街との縁。

雑木の庭には、建主の楽しみを奪わない様、あえて植樹はしていない。徐々に住み手によって手が加えられていくことで、雑木林は緑園となり、いつまでも街の中に残ってゆくであろう。